



## からだの中に軸をつくる

校長 井之上 良一

今年のNHKの大河ドラマは、皆様御存じのとおり『鎌倉殿の13人』(脚本 三谷幸喜)です。よく話題にされる視聴率の方も好調のようで、西田敏行さん演じる「後白河法皇」と松平健さん演じる「平清盛」がはまり役だと評判になっています。

今回も「平清盛」は、非道・非情の人物(悪役)として描かれているようですが、実在の清盛は上の者にも下の者にも心遣いのできる情け深い人物だったといわれています。

今から10年ほど前に放送された大河ドラマ『平清盛』では、確かにそうした姿も描かれていました。また、父である平忠盛の時代も丁寧に描写されており、父子の在り様という視点からドラマを眺めてみると、味わい深い場面がいくつもありました。中でも、父忠盛が「からだの中に軸をつくれ」と、清盛に繰り返し言葉を投げかける場面は強く印象に残っています。



主演(松山ケンイチ)

「軸」とは体(からだ)そのものの強さを意味しているのではなく、夢や志といった人生を賭して目指すべきものを意味しているものと思われます。他方、信念や哲学、信仰といった精神的な領域に属することも意味していると考えられます。いずれにしても、人生の荒波を泳ぎ続けていくためには、からだの中に強い軸が形成される必要がありますし、また、軸をつくり続ける努力をしていくことが必要なのではないかと思います。

その意味で、私たちは子どもたちが強い軸を形成できるように、日常意図的に働きかけをしていかなければならないと考えます。では、子どもたちを教育するに当たって、具体的にはどのような軸をつくる努力をしていけばよいのでしょうか。

戦中・戦後の特別な状況下で書かれたものではありませんが、人間としての軸の在り方を考える上で示唆的な文章があります。それは、『国民の遺書』(小林よしのり責任編集)という本に収められている次の一編(遺書)です。



話題になった同書の帯

(前略)一、私は敏子を離別します。一、敏子に再婚させてください。一、私を成仏させてください。私は敏子が現在の不幸に打ち勝って再婚し、母となり幸福になった時成仏できます。そのほかに成仏はありません。追善供養は不要です。お父様、お母様、敏子をいたわってやってください。彼女が涙もかれてしまい、精も根も尽きるほどの不幸に落としたのは私です。また悪い星の下に生まれた私であり敏子でありました。どうかいたわってくださいませ。最後の願いはこれだけです。(後略) [※ 旧仮名遣いを現代仮名遣いに修正して引用]

この遺書を残した陸軍の憲兵は、太平洋戦争後の軍事法廷で上官の命で従事していた中国人捕虜の警備が罪状となり、死刑を宣告された人です。従って、遺書は死刑を念頭に、その直前に書かれたものと推量されます。この遺書が読む者の心を強く揺り動かすのは、罪なき罪により死にゆかなければならないという不条理と向き合いながらも、最愛の人の幸せを願う、その愛の深さに胸を打たれるからではないでしょうか。

そして、遺書の後段には、「私は人生の喜びも、彼女によって与えられました。収容せられてもこの淋しい獄舎にて、暖かい便りや衣類を送ってくれ、その愛情に包まれております。私の心は幸福でした。」と記されています。ここに並んでいるのは、感謝に満ちた温かな言葉ばかりです。自らの生の意味、死の意味を問う中で、わき上がってきた感情が世の不条理に対する怒りではなく、ひたすらに感謝する心であったということは驚くべきことです。人間、いくら精進を重ねたとしてもこのように振る舞うことは難しいのではないかと思います。ここに、「感謝する」という心の軸を持った人の優しさと強さを思うのです。この感謝という心の軸こそ、多くの人が指摘しているように、子どもたちのからだの中に主軸として培っていききたいものです。

さて、翻って考えてみると、私たちの現実の姿はどうでしょうか。他人より自分自身のことを優先する考え方が支配的な面はないでしょうか。周囲の人や世間の存在を有り難く感じられているのでしょうか。また、感謝する心の大切さをどれほど子どもたちに伝える努力をしているのでしょうか。そして、それは行動や態度を伴ったものとなっているのでしょうか。少なくとも自分自身を振り返ってみると、心もとない限りです。

だいぶ前に聴いた講演の中で、講師の先生は「ありがとう」という言葉は魔法の言葉であると力説しておられました。すなわち、相手を大切に思っているというメッセージであり、有用感や存在感を与える言葉だというわけです。なるほど、「ありがとうございます」や「ごくろうさまです」といった言葉は、感謝の心に根差しており、日本語の中でも特に美しい言葉だと言ってもよいでしょう。しかし、私たちは日常生活や子育ての中で、そのことをどれくらい意識して使うことができているのでしょうか。一度振り返ってみる必要があると思います。

